

# バリアフリー社会に向けた 音声情報処理

## 小特集編集にあたって

編集チームリーダー 中沢憲二

2007年1月には、日本の高齢者（65歳以上）の人口比率（高齢化率）は21%（2,703万人）を超えました。一般に高齢化率が7%を超えた社会を高齢化社会、14%を超えたときには高齢社会といわれ、日本は世界で実質的に最初に超高齢社会（21%超）に入っています。また、心身障害は身体障害、知的障害、精神障害に大きく分類され、身体障害366万人、知的障害55万人、精神障害303万人（平成20年版障害者白書）です。

一方、現代社会において最新の情報を得たり、様々なサービスを受けるためにはインターネットの利用が不可欠になってくるなど、我々の日常生活においてオフィスだけでなく家庭生活においても情報化が進んでおり、生活の利便性の上で無視できない状況になっています。

このように急速に展開する情報化社会の中で、心身障害者・心身障害児や高齢者の多くはデジタル機器を使いこなせず、不利な状況になり、阻害され、いわゆるデジタルデバイドの問題として大きな社会的課題となっています。

社会的存在である人にとって、最もプリミティブなコミュニケーション手段は音声です。様々な視点から音声をみることは、障害者や高齢者のコミュニケーション支援を考える上での出発点となります。そこでは、音声そのものを利用する場合と、音声に関する知見や音声情報処理技術の手法を他のメディアなどに応用する場合など、様々な接点が存在します。

本小特集では、障害者や高齢者におけるデジタルデバイドの問題を取り上げ、情報福祉における音声情報処理技術を5件の解説記事にわたって紹介します。

まず、早稲田大学の市川熹先生に、「情報福祉と音声」と題して、コミュニケーションの心的負担が高い障害者や高齢者にとって、ユーザビリティへの配慮を高めることが重要であることを解説して頂きます。揮発性である音声や揮発性言語である手話や指点字にイントネーションや間などのプロソディ情報の活用を紹介頂きます。

次に、「発話障害と音声技術」では、神戸大学の滝口哲也先生らに、発話が困難な障害者を支援する取組みとして、音声認識や音声合成などによってコミュニケーションを支援する技術を紹介して頂きます。

「放送・教育における音声を利用した障害者支援」では、NHKの今井亨様らに、放送分野と高等教育分野において、聴覚障害者や高齢者を支援する取組みとして、字幕作成などの支援技術を紹介して頂きます。

「インターネットと音声合成」では、東京大学の西本卓也先生らに視覚障害者がインターネットを利用するために必要な音声合成など様々な技術を紹介して頂きます。

「音声の知見の情報福祉への応用」では、NTTの中園薫様らに、聴覚障害者のための手話に関する取組みや、視聴覚重複障害者のための指点字に関する取組みを紹介して頂きます。

以上、本小特集によって、音声研究者のみならず、多くの読者の皆様が、御自身の専門領域と情報福祉の関連を気付いて頂き、この領域に参入、あるいは関心を持って頂く機会となることを期待します。最後になりましたが、この小特集の企画段階から編集に至るまで、早稲田大学の市川先生に多大な御指導・御協力を賜りました。編集チーム一同、お礼申し上げます。また、御多忙中、大変有益な原稿を御執筆頂いた著者の皆様に心よりお礼申し上げます。

小特集編集チーム 中沢 憲二 鷲見 和彦 生駒 洋子 奥田 英範 苗村 昌秀 吉田 昌司